

## 「淡路島のニホンザルから考える寛容性と協力社会」

山田 一憲

大阪大学大学院人間科学研究科

講師

一般的なニホンザルの社会は優劣関係が厳格である。食物の優先権は優位個体にあり、劣位個体は優位個体の前では食物に手を出したり、近づいたりすることができない。しかし、淡路島に生息するニホンザルは、他地域のニホンザルと比較して特異的に寛容な社会を形成している。

淡路島では、大豆を用いて地面に文字を書くと、その文字通りにサルが密集し「サル文字」を描くことができる。サル文字は、他のニホンザル集団では描くことができない。食物を独占したい優位なサルが劣位のサルを追い払ったり、争いを避けたい劣位のサルが食物から逃げてしまったりするためである。

淡路島集団では、劣位個体が食物を得ることを優位個体が許容するだけでなく、優位個体と劣位個体が協力することで、ひとりでは達成できない課題をクリアすることもできた。

寛容な淡路島のニホンザルに注目することで、私たちヒトが寛容で協力的な社会を築く手がかりについて展望を深めたい。



淡路島のニホンザルが描く「サル文字」



大阪大学大学院人間科学研究科・講師

2007年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、博士(人間科学)。

日本学術振興会特別研究員(京都大学野生動物研究センター)を経て、2010年より現職。一般社団法人淡路ザル観察公苑理事。岡山県真庭市に生息する勝山ニホンザル集団と兵庫県洲本市に生息する淡路島ニホンザル集団を対象としたフィールドワークを20年以上継続している。著書に、『争う』(編著)、『助ける』(分担執筆)、『正解は一つじゃない 子育てする動物たち』(分担執筆)など。